

私が出会った人々

木 畑 和 子

本稿は、成城大学を退職するにあたり、幼少期から現在に至るまで、また研究者としての道を歩んでいくなかで、私が出会った人々について語る個人史である。もう会うことはできない、思い出の中にいる方たちも多い。

戦後のベビーブームの先頭を切って、私は世田谷区等々力に生まれた。尾山台小学校に入学したが、教室が足りなかったので、二部授業だった。等々力小学校という分校ができるまで、朝と午後で別のクラスが同じ教室を使った。袋に入った給食用のアルミのボウルとお皿をランドセルにぶら下げて、カタカタさせながら学校に通った。おそらく午前と午後と定期的に交代させていたのではないかと思う。学校から帰って、戦争によって家族や知人と生き別れた人々がその消息を求める「尋ね人の時間」を聞いていた記憶がある。学校から帰った時間と「尋ね人の時間」の記憶が結びついており、午後の部から帰った後に聞いたのではないかと思うが、今となっては正確なところが分からない。男性アナウンサーが淡々として読み上げる情報から、戦争がもたらしたさまざまな「別れ」の様子を子供ながら想像したことはよく覚えている。クラスメートの女の子が「うちのお父さん人間の肉食べたんだって。人間の手というのは筋が多くておいしくなかったんだって」と人肉食を冒険談のごとく話していたことも、よく思い出す。戦後生まれといっても、生活のはしはしに戦争が残っていた。

幼いころの屈辱の体験をつい最近また思い出した。女中さんを主人公にした中島京子『小さいうち』を読み、その記憶が改めてよみがえったのだ。小学校入学以前であることから、おそらく5歳だったのではないかと思う。女中部屋で若い女中が私と弟に豆菓子数粒を何度かに分けて投げてよこした。ずっと以前からすっかり見なくなったウグイス色で塩味のついた小さな豆である。2歳か3歳だった弟が食べたさ一心で畳の上の小さな豆を懸命に

拾っていた姿を思い出す。私も拾って食べたのではないかと思う。しかし、笑いながらエサのように投げ与える彼女の姿に、このことが何を意味するかすぐに理解できた。彼女の顔も全く覚えていないが、人生で初めて経験するあざけりの笑いというものが刻み込まれた。この話は誰にも話したことがなかったのも、他から与えられた記憶ではない。

我が家は『小さいうち』のような豊かな家庭でもなく、一家6人でそれこそ小さな家に住んでいた。行儀見習いとはいえ、他人の家庭に住み込んで言いつけられた家事をするという、自分の能力、気持ちを抑え込んでの仕事であろう。今ならほとんど家電製品が片付けてくれるような肉体労働である。そのような鬱屈した気持ちが幼い者への態度に残酷な形ででたことは想像にかたくない。ある時、その女中は庭で遊んでいた弟の体に物干し竿を落としてしまい、弟が驚いて泣き声をあげたところ、自分のせいではないように思わせるため、「あらどうしたの」と平然と大きな声で言って弟にかけよったのだが、その一部始終を母に見られて、ヒマを出された。このことはずっと後になって聞いたのだが、あの「豆事件」との関係で、彼女がいなくなった理由が腑に落ちた。人間性の問題もあるが、抑圧された人々が時にみせる残忍さや「ずるさ」、あるいはかつての丁稚や女中奉公という仕事について考える時、またナチ時代に行われた「普通の人」による残忍な行為を知るにつれ思い出すエピソードだった。アウシュヴィッツ収容所の初期、ロシア人捕虜に看守が高い柵の上からパンを投げ与えている映像が残されているが、それを見た時にも、我が家の女中さんを思い出した。

大学進学では迷わずに史学科を選んだ。都立駒場高校の歴史教師たちの影響が大きい。過去を学ぶことによって、ものの見方が開かれることが面白

かったし、またそれぞれが戦争を抱えていた教師個人にも関心をもった。一人の世界史の教師は少年時代、いたずらの罰として校庭のグラウンドを何周も走らされたが、その時グラウンドに不時着しようとした軍の訓練機が着陸できず、校庭の木に激突し、その飛行士は死んだという。だから、僕は戦争開始以前から国賊第1号と呼ばれたということだった。先生方の年齢はほぼ同じよう見受けられたが、戦後のレッドパージでそれまでの教員が追放されたため、就職できたと話した先生もいた。「原罪」ともいえるようなものを抱えて生きているように私には受け止められた。また一人の先生が自分は歴史関係の映画はできるだけ見るようにしている、と言われたことを受け、それ以来私もできる限り歴史関係の映画をみるようにしてきた。

東京女子大学では、ドイツ史の西川正雄先生についた。入学時、第二外国語にドイツ語を選んだという単純な理由からであるが、それが自分の人生を決定した。それ以来、西川先生には亡くなるまでずっと恩師として存在した。他の大学や他の学部に入ったら、また他の人生があったと思うが、感受性の強い時代に出会った人々からの影響は絶対的だった。

質の高い授業、ゼミでは学問の厳しさ楽しさに魅了させられた。読書会など自主的勉強グループも作ったし、またドイツ語講読ゼミの前や夏休みに何人かで集まってテキストの予習をし、ゼミに臨んだ。ゼミでは毎年、一人が泣き出すような厳しさであったが、その筋を通す生き方、またゼミコンパなどで女性の自立と社会進出を励ます先生によって、当時の女子大生には珍しく、ゼミメンバーの約半数が大学院に進学した。その時代、東京女子大学には大学院がなかったため、他大学の大学院に進学していった。

大学ではさまざまな分野の著名人の講演会があり、積極的に聞きに行った。第三帝国時代、抵抗運動に参加し収容所に入れられた M. ニーメラー牧

師の講演も聞いた。一番心に残ったのが、当時教科書裁判で時の人だった家永三郎氏の講演の言葉であった。「戦争中、自分は恥ずかしいことはしなかったが、自分がしなかったことに恥ずかしいことがある」という裁判への出発点となった言葉である。この「恥ずかしさ」という言葉はそれから30年後ドイツで、全く同じ文脈で聞くことになった。これは後で述べたい。

学生時代には民俗学の授業に惹かれ、西洋史専攻であったが日本史専攻の学生と一緒に民俗調査にも参加した。板倉の神社に宿泊し、農家をまわって、衣服について調査をした。この調査については、『利根川中流水場のムラの民俗 群馬県邑楽郡板倉町石塚』としてまとめられ、現在古書でそれなりの値がついている。この調査で聞き取りの注意点を学んだことは、後になって歴史の証言者とのインタビューに大いに役立った。

宿泊した神社の物干場で、無邪気にはしゃいでいた私たちに、「あなたたちは幸せそうでうらやましい」と洗濯を干している神社の手伝いの女性から率直なものいいで言われたことを思い出す。当時、地方での女性の大学進学率はまだ低かった。進学したくてもできない人々がいること、そしてすぐそばにもそのような青春が送れなかった人々がいるということに気持ちがいかなかった自分を恥ずかしく思った。

西川先生はマルクス主義の影響を強く受けている先生ではあったが、パリコミューンが急進的であったため、かえって社会運動が停滞したというようなことを言われたのが印象的であった。これは、学問的というよりも、当時多くの大学では大学紛争が激しく、急進化しつつあった日本の学生運動に対する批判を間接的に言われたのかと思われた。「あさま山荘事件」の後、日本の学生たちは急速に政治や社会変革に対する関心を失っていった。68年運動がドイツでは緑の党という政党誕生までつながったのと大きな違いであ

る。東京女子大でもゼミ仲間の何人かが大学を中退し、運動に専従していった。しかし息の長い影響力のある政治活動にはつながっていなかった。

東京女子大でもバリケードが築かれた。その解除の際に、研究棟に立てこもったヘルメット姿の学生が研究室書架の本を教員に投げつけるということも起こった。私はノンポリではなかったが、どの組織にも所属しなかった。他大学で徐々に過激化していったその段階の戦術をそのまま「直輸入」して、それを実行しようとした彼女たちには、埋められない距離感を感じた。紛争中ではあるが、私はどうしても「自立した女性」になりたいと思い、そのために就職がしたかった。就職すれば、「自立」したことになる、と単純に思っていたが、いずれにせよ、就職は自立の第一歩には違いない。

都立大学（現首都大学東京）大学院にはほとんど準備もなく合格した。東京女子大では紛争のため授業が中断された時期もあったが、紛争の根も浅く、基本的に授業が受けられていた受験生は有利だったのかもしれない。社会科教員や出版社など、希望した就職がうまくいかず、勉強もしたいと進学したのだが、研究者になるためのしかるべき準備をしてこなかった分苦労した。ちなみに高校教師の代わりに大学で教えることができたし、また日本ドイツ学会の機関誌『ドイツ研究』で編集作業に20年近く携わり、出版業界で働きたいという大学時代の「夢」も部分的に実現することができた。

都立大学では大学紛争もおさまっており、通常通りの授業は行われていたが、まだその「余韻」が強く残っていた。非常に政治意識が強い、また「同一陣営内」での仲間意識の強い雰囲気だった。戦時中に特高の拷問を受けた先生もおり、尊敬をこめてその先生の名前が語られた。また教員と院生の距離も近く、研究室主催でハイキングに行ったりした。指導教官の遅塚忠躬先生（フランス近代史）はマルクス主義から早く離れており、教員たちが校庭

でデモをしている時、校庭の脇に立っておられた。デモに反対ではないが、それには加わらないという距離を示されたのだと思う。また先生の都立大での最終講義の際、マルクス主義からの脱却について、真摯に述べられた姿は、印象的であった。

都立の大学院時代、研究者の道に進む気持ちが強まった。当時都立大学には博士課程がなかったため、結局東大の大学院の修士課程に入りなおした。お互いに石を投げつけあった院生の間の対立の空気は外部から入った私にもはっきり伝わり、「どっちの人」と色分けされた。本稿で、「政治の季節」の人間像について、もう少し具体的に書くことも考えたが、やはりできなかった。それで思いだしたのは、『ドイツ研究』のために戦中・戦後のドイツ史研究者についての原稿を村瀬興雄先生に連載を期待しつつお願いしたが、最初の原稿をいただいた際、「あと何人か亡くなってからでないとこれ以上は書けません」と言われたことだ。結局、「未完」と記されたまま、ご本人が先に亡くなってしまった。

研究者の道に進みたいと東京大学大学院に入ったものの、女子院生の道は厳しかった。都立時代にも女子院生は「高等遊民」と呼ばれたが、東大では入学時に就職の世話はしません、ということをはっきり言われた先輩がいるということが語りつがれていた。先輩の女性研究者たちの中には、大学に就職したものの助手に「塩漬け」状態が20年とかいう方もおり、また修士のみで他の道を探すという人もいた。現在の若手研究者は男女とも就職の苦労があるが、かつて女子院生はほとんど最初からその対象外だった。もちろん、大学の世界のみならず、会社では女子は寿退社が不文律のような時代であった。私の友人で大変健康で現在も行政的手腕を発揮するなどバリバリ働いて

いる人がいるが、その人が院生時代に手術を受けた際、西川先生は就職に不利になるといけないから手術のことは人に話さないように、とアドバイスしていた。

自立を望みながら、全く就職の展望のない研究者の道を歩もうとするのは、矛盾していることで、ずいぶん葛藤があった。やれるところまでやろう、と研究を続けているうちに、大学の新学部増設や短大の四大化の波が起こり、結果として私の世代の女性研究者の多くが職を得ることができた。それでも何か女性教員で問題が起こると「だから女はダメなんだ」と個人の問題としてとらえられず、すぐに女性全体の問題にされる時代だった。学生時代「就活」で苦勞していた時、君たちの先輩がいけないから、とある教員から言われたことがあるが、私たちの世代の多くは次の世代の女子院生に迷惑がかからぬように、「女性だから」と言われないように努力してきたのではないかと思う。非常に苦しい状況に置かれた時、尊敬する人にそのことを訴えたところ、「女性は文句が多い」という一言が戻ってきた。それ以降、「女性は」と言われないように、さらに気をつけるようにした。「女性だから」と職場でネガティブに評価されまい、と懸命になった私たちの気持ちに対して、今の若い女性たちは違和感をもつかもしいない。男女の別なく個人として評価される時代になってきたことを実感する。

都立大の修論ではヴァイマル期からナチ時代にかけての農業問題を、東大の修論ではナチス経済を、ドイツ学術交流会（DAAD）の奨学金でドイツに留学（76～78年）した際は、ヘルマン・ゲーリング工業所というナチの企業を通して、侵略戦争と経済的支配の問題を扱った。1990年、東洋英和女学院短期大学の教員時代にイギリスでの研修の機会を得た。図書館で文献を読んだり、またロンドン大学のゼミに出ることは出たが、家族でイギリスに

行ったこともあり、日常的に英語を話すという機会がなく、英語の会話能力の向上は全く見込めなかった。しばらくして、かのシュリーマンの語学習得方法を思い出し、英語を話す機会確保のために個人を雇うことを思いついた。たまたま近所の日本食料品店で見た「英会話を教えます」という張り紙を頼りにイーヴという女性とコンタクトをとったことが、私のライフワークともなったキンダートランスポート研究の始まりである。

イーヴのドイツ訛りの英語で、彼女がドイツ出身であるということはすぐに気がついた。1938年末から39年9月に戦争開始までの間、キンダートランスポートというイギリスによるユダヤ人の子供救出作戦によって、助けられた一万人の子供の一人だった。彼女がイギリスに来たのは12歳の時だが、出国できなかった父親はアウシュヴィッツで殺害された。彼女にインタビューを開始する経緯は拙著『キンダートランスポート』（成文堂）に書いたが、彼女へのインタビューが英会話のレッスンを兼ねるということにさせてもらった。しかし機微に触れるような話やナチ時代の具体的な話となっていくと、結局英語ではまにあわずドイツ語での会話となった。今まで書物で学んできたことが、一人の生身の人間の歴史を通して語られるというインタビューの作業そのものに魅了された。

昨年（2013年）のクリスマスにもイーヴから手紙が届いた。その半年前、私がロンドンのキンダートランスポート75周年記念シンポジウムに参加した際、イスラエルから資金がでているユダヤ人の老人ホームに住む彼女を訪ねた。彼女から、息子にも話さなかったことをあなたにすべて話したが、それが自分のそれまでの苦しみや葛藤の癒やしになった、と言われた。それはとても嬉しい言葉であった。人との信頼関係で、一つの作品が生まれたが、プライバシーやあからさまな感情を含む彼女の個人史の出版はあれでよかつ

たのか、許可を得ていたものの、市井の人間についてここまで書いてよかったのだろうか、いつも心に引っ掛かるものを感じていたからである。

イーヴは少しでも自分のような思いをする人が生まれないように、という使命感をもって話してくれたが、彼女は養父母に対して命を救ってくれたことには感謝しても、決して養父母を許していない。懸命にドイツから出国しようとしていた父親が、ようやく外国での仕事を得られ、出国の可能性ができたので、出国にまつわるお金を貸してほしいと養母に頼んできたことに対して、養母は12、3歳のイーヴにお金を貸すべきかどうかを尋ねたのである。当時ドイツでは出国できなかったユダヤ人の貧窮化が進み、また出国にはナチが課した出国税など多額の費用が必要であった。養父母にはいろいろ助けて下さって感謝していますというようなことを幼い精一杯の気遣いで言ったところ、その言葉をそのまま受け取った非常に裕福な養母はお金を送らなかった。お金を貸すかどうかについて子供の判断にゆだねた形で、結果として父親の死に対して「共犯関係」のようにされたことが許せなかった。彼女は自分を責め続け、そして養母を許さず、自立の歳になったらすぐにその家を出た。その後、キンダートランスポートの子供たちの手記を多く読んだが、自分の命を助け、育ててくれたイギリスや養父母に対して、感謝の言葉がほとんどであるなかで、時に恨みのような言葉に触れることがある。問題はナチズムであるのに、気持ちがナチズムやナチズムを支えたドイツ人よりも、養父母から受けた屈辱などのほうに心がむいてしまうのが、痛ましくも感じられた。

この間、子供たちを救出し、育てたというキンダートランスポートのストーリーは、ホロコーストと対比され、イギリスの寛容さと慈善を示すものとして、高く評価されるようになった。キンダートランスポートの記念碑が

ロンドンに建てられ、「子供たち」のイギリスに対する感謝の言葉を刻んだプレートが議会に掲げられた。またその70周年記念にはチャールズ皇太子の「ご臨席」があり、昨年の75周年には「子供たち」がセントジェームズパレスへ招待されるなど、キンダートランスポートはホロコーストにおけるイギリスの輝ける歴史として扱われている。

実際戦時下において、さまざまな困難がありながらも、イギリスが子供を引き取ったことに私も深い感銘をうけ、それが私の研究の原動力ともなったわけである。ただ子供たちの救出を顕彰することは、イギリスをはじめとする世界各国がドイツに残ったユダヤ人たちは出国できなければ殺害されるという状況を知りながら、子供たち以外には門戸を閉ざしたという過去を覆い隠すものともなったことも忘れてはならない。

2004年のベルリン研修ではキンダートランスポートでイギリスに行き、在英中に共産主義者たちの影響を受け、旧東ドイツに帰国した人たちにインタビューをした。11人と人数が多いので、集団ポートレートのようなものを構想した。その後、数年間毎夏ベルリンに出かけ、インタビューを続けた。彼らはイギリスで、亡命ドイツ共産党員の影響を受け、ファシズムと闘おうとした人々である。ドイツのユダヤ人たちは迫害を受けても闘わなかった（これは、同化努力が強かったユダヤ人にとって、当然の結果でもあった）。しかし共産主義者たちは生命をかけてファシズムと闘った。そのことに尊敬の念をいただき、十代後半だった彼らは反ファシズム・共産主義運動に加わった。また戦後は社会主義国家建設を助けたいとドイツに帰国した。このような人たちは例外的である。

キンダートランスポートという存在そのものが1990年代ごろから、ようやく知られるようになり、その後学問的研究も進んできた。東ドイツに帰っ

た人々に焦点をあてての研究はこれまでなかったため、これで新たな研究対象をひらきたいと思った。ドイツでファシズムを、イギリスで民主主義を、さらに東ドイツで社会主義を体験した人々を通して、20世紀を描いてみたかった。イデオロギーとしてではなく、現実存在した社会主義についてあらためて考えてみたかった。

私が学生時代に学んだ歴史学はマルクスとマックス・ウェーバーの影響が非常に強い。筋金入りのマルクス主義歴史学者のある日本近代史の先生にソ連崩壊後ばかり会ったことがあるが、その先生が私に、自分は間違っただけを教えたのではないかと問いかけるような形で聞かれたことに非常に当惑した思いがある。その先生とは学会でお目にかかったぐらいの関係しかなく直接教わったことのない先生である。誠実さからお詫びされたのかもしれないが、自分が信じたものが崩壊した、悔恨の念で言われたように受け止められた。

私はといえば都立の大学院時代、マルクスの『資本論』を一部読んでみたものの、やはり難解で自分のものにすることはできず、それ以上全く研究することもなく、関心も深まらないまま終わった。マルクス主義的な用語を聞かなくなってから久しいが、その40年後に旧東ドイツの人々と社会主義について話した時、その言葉が生きていたことに正直懐かしさまで覚えた。

私がインタビューした人々の旧東ドイツ社会に対する気持ちはさまざまであるが、そのほとんどは懐古の念をもっているように思われた。実際には、マルクス主義の平等理念など理想と考えた社会主義社会は、すぐに現実政治とスターリン主義によって支配され、またその経済原理は資本主義に敗北することになった。

帰国後、彼らは家族の支えのない新生国家で、生活をたてていくことに懸

命であった。東ドイツは彼らに多くのチャンスを与えたが、それは社会主義建設の初期の段階であったから可能だったともいえた。また、あるインタビューでは、リーダー的な仲間が交通事故で死んだのも、ソ連批判をしようとしたことで、殺されたのではないかと思うという話が出たが、このことは絶対書かないで欲しいといわれ、結局語り手を明記した論文では控えざるを得なかった。

親しくなった東ドイツ出身の女性研究者（フランスに亡命した父親はレジスタンスに加わり、戦後東ドイツへ帰国。彼女自身は体制末期に離反し、現在は東ドイツに関して活発な執筆活動を行っている）が、旧東ドイツの人々は「東ドイツが崩壊するのは分かっていた」、あるいは「改革すれば、東ドイツの社会主義は続くことができた」かのどちらかをいうと言っていたが、私がインタビューした人たちもほとんどそのどちらかだったように思う。東ドイツを批判した後、やはり書かないで欲しいといわれ、東ドイツ経済をあまりに称賛している人については、その主張にはその人が「愚か」なような印象を読み手に与えるのではないかと、かなり削った。インタビューから歴史を叙述する限界だった。東ドイツ「不正国家論」が盛んに語られる時代に、どこまで彼らが本音を語りうるのか、その時代的制約の前提を明記し、執筆した。しかし、活字にできないようなことや生の感情を聞けたことは、東ドイツの生活を理解するために、貴重な経験となった。また、イギリスで若い孤独な難民同士として助けあい、そして帰国後もお互いに支えあって生きてきた人々のもつ暖かさを、非常に心地よいものと感じたし、理想が現実とぶつかり合う中で、真摯に生きてきた人々に敬意を抱いた。

もう一つの私のライフワークの「ナチ時代の医学の犯罪」で行ったインタビュー(93年)で印象的だったのは、不妊手術の犠牲者であるクララ・ノヴァ

ク氏である。映画「ニュルンベルク裁判」に、証人として登場した男性が精神薄弱のため断種手術を受けさせられた人間で、その証言には信憑性があまりないと判断されるエピソードが挿入されているが、断種手術を受けさせられたのは、精神障害者だけではない。万引きなどの軽犯罪でも精神障害とされ、断種手術を受けさせられたのである。

ノヴァク氏は何度か失神したことなどから精神的な疾患があるとされ、強制的不妊手術を受けさせられた。この原稿を書くためにネットで彼女がまだ存命かどうか、調べたが、やはりすでに亡くなっていた。ネットでみた彼女の若い時の写真は、美しく聡明な印象を与えるものであった。ナチは、通常の生活を送ることができた健康な人たちにも「遺伝的」精神病であるとして、子供を産めない体にしたのである。戦後彼女は看護婦として働いてきた。彼女自身、自分のように手術させられた人がいることを知ったのは、70年代に入ってからであり、40万人もの被害者がいることはほとんど知られていなかったのである。彼女はその被害者連盟を創設し（1987年）、その代表となったが、それはデルナー博士という精神医学者の尽力であり、被害者が復権と補償を求めて立ち上がることで、その人々の精神的な苦しみからの解放も図ろうとしたのである。

デルナー博士は、自分のまわりに50年も苦しんできた断種手術の犠牲者たちが大勢いたことを全く知らなかった、それはとても恥ずかしいことだった、だからこの犠牲者の組織の立ち上げに関わったという。30年ほど前に聞いた家永氏と同じ言葉だと思った。このデルナー氏の発言を聞いたのは、「医学と良心」という核戦争防止国際医師会議（IPPNW）が開催したシンポジウム（2001年）に参加した時だった。デルナー氏のまわりには彼の高い倫理性にひかれた若い医師・医学者が集まっていた。

本稿を結ぶにあたり、女子院生としての育児の苦闘時代を支えてくれた方々のことを記しておきたい。子供があまりに病弱なため保育所に入れるのをやめ、研究をほとんどあきらめかけた時に子供を預かってくれた近所の5人の方々である。どうにか長女を認可保育園に入れることはできたものの、当時の埼玉県保育所環境は劣悪で、子供が死なないぎりぎりのような保育士の数だった。子供は病気ばかりし、保育所に行く代わりに医者通いの毎日、さらに2度も入院手術をすることになり、結局保育所に預けるのをあきらめた。長男も体が非常に弱く、保育所に入れることなど最初から考えようがなかった。お正月になると、前年度分の医療費のレシート（当時は有料）を数えたが、200枚以上あった年が数年続いた。要するに一年の三分の二近い日々が長男の医者通いに費やされたのである。そのような状況のなか、近所の方々が助けてくれ、どうにか時間確保ができ、研究を続けることができた。

私の研究が世界を変えたり、多くの人々を救ったりすることになる、というようなものであればまだよいが、将来への展望もないまま、ささやかな歴史研究という自分の生きがいのために、好意とはいえ他の方々の時間を割いてもらっていることに、いたたまれぬ思いがした。自分が暖かな部屋で専門書を読み、精神的な充実感を得ていた時、窓の外では、子供が夢中になって積もった雪で遊んでいるのを、近所の方が寒い中じっと立って見て下さっていた姿が、今も目に焼き付いている。

私を助けてくれたある方から、「自分自身も助けてもらったことがあるけれど、その助けてくれた人から、このことは他の人を助けることにつなげて欲しいと言われた」という言葉をもらった。その言葉はいつも私の心にある。またある方は、自分は教員として働いていたが、無理がたたってかせっかく

授かった子供を死産させてしまったため次の妊娠の時には教員を辞めたけれど、貴女には頑張してほしいと言って、手伝ってくれた。本当に有難かった。育児・介護などをやりながら仕事を続けていくには、周りの物理的・精神的な支援が欠かせない。私には幸運にもそのような支援があったから、困難を乗り越えてこられた。このことには感謝しても感謝しきれない。

本稿ではとても書き尽くせなかったが、このような道を歩んできて、多くの人間性のすぐれた人たちに出会うことができた。私の接した学生からもいろいろ学ぶことがあった。すべての方たちに感謝の気持ちを伝えることはできないが、また別な形でお礼ができればと思っている。

木畑和子 略歴および研究業績

略歴

1947年生まれ

【学歴】

1970年3月 東京女子大学文理学部史学科卒業

1972年3月 東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻修士課程修了

1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻修士課程修了

1975年7月 DAAD（ドイツ学術交流会）により、ミュンヘン大学歴史学専攻留学
（77年10月まで）

1981年9月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻博士課程単位取得満期
退学

【職歴】

1986年4月 東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師

1989年4月 東洋英和女学院短期大学国際教養科助教授

1995年4月 東洋英和女学院大学短期大学部国際教養科教授

1997年4月 東洋英和女学院大学社会学部社会科学科助教授

1999年4月 成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科助教授

2003年4月 成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科教授

その他、日本大学、横浜国立大学、拓殖大学、東京女子大学、フェリス女学院大学、横浜市立大学、立教大学、東北学院大学、東京大学で非常勤講師をつとめる。

【学会活動】

1970年～ 現代史研究会会員（1991年～93年編集委員。2002年度運営委員長）

1973年～ 歴史学研究会会員（1993年～95年委員）

1990年～ 日本ドイツ学会会員（1995年より編集委員、2008年編集長、1999年～2013年理事）

【受賞】

2003年 第40回日本翻訳出版文化賞受賞（ウォルター・ラカー編 望田幸男
他共訳 『ホロコースト大事典』 柏書房、2003年、に対して）

研究業績

【単著・共著・単行本所載論文】

『キンダートランスポート ナチス・ドイツからイギリスに渡ったユダヤ人の子供たち』（単著）成文堂、1992年

『1939 ドイツ第三帝国と第二次世界大戦』（井上茂子他と共著、執筆章「第二次世界大戦下における『安楽死』問題」）、同文館、1989年

『医学と戦争』（常石敬一他と共著、執筆章「ナチズムと医学の犯罪」）御茶の水書房、1994年

『智山李揆河教授華甲紀念論文集 世界歷史의 만남과理解』（執筆章「독일 제 3 제국의 ‘의학범죄’（번역문）」）智山李揆河博士華甲紀念論文集刊行委員會、1999年

『ドイツ社会史』（矢野久他と共著、執筆章「マイノリティ」）有斐閣、2001年

『ナチズムのなかの20世紀』（川越修他と共著、執筆章「民族の『健康』をめざして 第三帝国の保健衛生行政」）柏書房、2002年

『満州—その今日の意味』（小林英夫他と共著）つげ書房新社、2008年

【雑誌論文】

「ナチス第三帝国下の国営企業—ヘルマン・ゲーリング帝国工業所の成立と発展」『歴史評論』367号、1980年

「ナチス・ドイツのチェコ経済侵略—ヴィトコフ・ヴィツ鉱山・製鉄会社をめぐる」

『史論』（東京女子大学）36集、1983年

「ナチスの対ポーランド占領政策—その経済政策とヘルマン・ゲーリング工業所の活動に関する覚書」『史叢』（日本大学）35号、1985年

「第三帝国と『安楽死』問題—『安楽死』のいわゆる『中止』まで」『研究紀要』（東洋英和女学院短期大学）第26号、1988年

「第三帝国の『健康』政策」『歴史学研究』640号、1992年

「ベアテルと『安楽死』問題—v. ボーデルシュヴィングの『抵抗』評価をめぐる」『研究紀要』（東洋英和女学院短期大学）第33号、1995年

「ナチス『医学の犯罪』と過去の克服」『世界』第613号、1995年

「ドイツ第三帝国の断種政策と『安楽死』問題に関する最近の研究動向」『研究紀要』（東洋英和女学院短期大学）第35号、1997年

「第三帝国の『安楽死』と優生学—シュヴァルトのシムール批判をめぐる」『成城文藝』第168号、1999年

「第三帝国期の予防医学—レオナルド・コンティを中心に」『ヨーロッパ文化研究』第22集、2003年

「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち（1）」『成城文藝』第195号、2006年

「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち（2）」『成城文藝』第197号、2006年

「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち（3）」『成城文藝』第199号、2007年

「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち（4）」『成城文藝』第200号、2007年

「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち（5）」『成城文藝』第203号、2008年

「第三帝国と亡命ユダヤ人 「子供」の出国をめぐる問題を中心に」『史潮』新64号、2008年

「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち（6）」『成城文藝』第207号、2009年

「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち (7)」『成城文藝』第 208 号、2009 年

「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち (8)」『成城文藝』第 211 号、2010 年

「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち (9)」『成城文藝』第 212 号、2010 年

【翻訳】

ウォルター・ラカー編『ホロコースト大事典』（望田幸男他と共訳）、柏書房、2003 年

ヴェラ・ギッシング『キンダートランスポートの少女』未来社、2008 年

【その他（書評、資料紹介、解説、エッセイなど）】

H. ラウシュニング『ニヒリズム革命』、『ニヒリズムの革命』（書評）

『日本読書新聞』1972 年 12 月 14 日

R. キューンル『自由主義とファシズム』（書評）『歴史学研究』454 号、1978 年

「ニュルンベルク裁判文書と若干のアルヒーフ史料について」（永岑三千輝氏と共著）、『現代史研究』（現代史研究会）29 号、1979 年

P. ゲイ『ベルンシュタイン』、関嘉彦『ベルンシュタインと修正主義』（書評）

『史学雑誌』90 編 2 号、1981 年

雨宮栄一『ドイツ教会闘争の展開』（書評）『史学雑誌』91 編 3 号、1982 年

村瀬興雄『ナチス統治下の民衆生活』（書評）

『現代史研究』（現代史研究会）31 号、1984 年

「現代ドイツ」『史学雑誌』91 編 5 号「1985 年の歴史学会 ―回顧と展望」、1986 年

小田実『西ベルリンで見たこと 日本で考えたこと』（書評）

『ドイツ研究』（日本ドイツ学会）9 号、1990 年

真鍋俊二『アメリカのドイツ占領政策』（書評）

『ドイツ研究』（日本ドイツ学会）10 号、1990 年

G. シュヴァルベルグ『子供たちは泣いたか』（書評）『図書新聞』1991 年 9 月 14 日

「亡命者たちのイギリス」上・中・下『UP』（東大出版会）225-227 号、1991 年

尚友倶楽部品川弥二郎関係文書編纂委員会編『品川弥二郎関係文書1』

(青木周蔵書簡、ドイツ語書簡の校訂・監訳)、尚友倶楽部、1993年

「忘れられた犠牲者」との「出会い」の旅『季刊戦争責任研究』6号、1994年

木谷勤／望田幸男編『ドイツ近代史—18世紀から現代まで』(書評)

『歴史学研究』653号、1993年

Besuch der Ausstellung > Unit 731 < , *Mittelwege* 36,

Zeitschrift des Hamburger Instituts für Sozialforschung, H.6, 1993/1994

小侯和一郎『ナチスもう一つの大罪—「安楽死」とドイツ精神科学』(書評)

『科学』65号、1995年

芝健介『武装SS—ナチスもう一つの暴力装置』(書評)

『史論』(東京女子大学)第49集、1996年

川越修『性に悩む社会—ドイツある近代の軌跡』(書評)

『週刊読書人』1996年3月29日

「医学と良心—ニュルンベルク医師裁判から50年」

『ドイツ研究』(日本ドイツ学会)24号、1997年

クレイ／リーブマン『ナチス・ドイツ支配民族創出計画』(書評)

『週刊金曜日』1998年1月23日

「キングダートランスポートから60年—再会したユダヤ人の「子供たち」」(1)(2)(3)

『未来』399-401号、1999-2000年

芝健介『ヒトラーのニュルンベルク 第三帝国の光と闇』(書評)

『歴史評論』605号、2000年

『角川世界史辞典』(項目執筆、「安楽死政策」など)、角川書店、2001年

ヨアヒム・フェスト『ヒトラー 最期の12日間』(書評)

共同通信社配信各紙、2005年7月

「『白バラ』とドイツ抵抗運動」『歴史地理教育』（歴史教育者協議会）703号、2006年
歴史学研究会編『世界史史料 二〇世紀の世界Ⅰ ふたつの世界大戦』

（項目執筆、「ドイツの戦争目的」など）、岩波書店、2006年

「救出された子供たち キンダーtransport七〇周年記念リユニオン」

『未来』510号、2009年

工藤章・田嶋信雄編『日独関係史 1890-1945』（文献紹介）

『日本歴史』735号、2009年

「亡命ユダヤ人のオーラルヒストリー キンダーtransportから東ドイツへ」

『西洋近現代史研究会会報』26号、2012年

「歴史を生きる人々」『成城教育』160号、2013年